

保育施設における障がいのある子どもの運動・スポーツ活動(運動遊びを含む)に ついてのアンケート調査(施設管理者対象)報告書

1. 調査の目的

本アンケート調査(以下、「アンケート調査」という。)の目的は、保育所やこども園、幼稚園など(以下、「保育施設」という。)で障がいのある子どものスポーツ(運動遊びを含む)の実施状況、保育施設管理者の運動やスポーツに対する課題や希望などの考え方について明らかにすることである。

2. 調査の概要

アンケート調査は、Microsoft Forms(以下、「Forms」という。)で作成した。アンケート調査の依頼先は、熊本県保育協会、熊本市保育連盟加盟の保育所、認定こども園施設長(園長・管理者であり、以下、「施設管理者」という。)である。なお、40施設から回答を得た。

また、個人情報保護の取り組みとして、アンケート調査の目的、個人情報保護等を説明した文書を同封し、承諾いただいた施設管理者に回答を依頼した。

3. 調査の内容

調査の内容は、基本情報として、回答者の基本情報、性別、年齢、職位、園の情報、保育園・こども園など、公立・私立、定員、障がいのある子ども(配慮が必要な子どもを含む)の在籍の有無とその人数、障害認定の有無と人数、障害種別である。

次に、障がいのある子どもの運動やスポーツの取り組みの状況について、スポーツ種目、具体例、頻度、配慮事項、困難事例、障がいのない子どもの育ちの影響、感想などについて調査した。

調査期間は、2022年11月1日から2023年1月31日である。

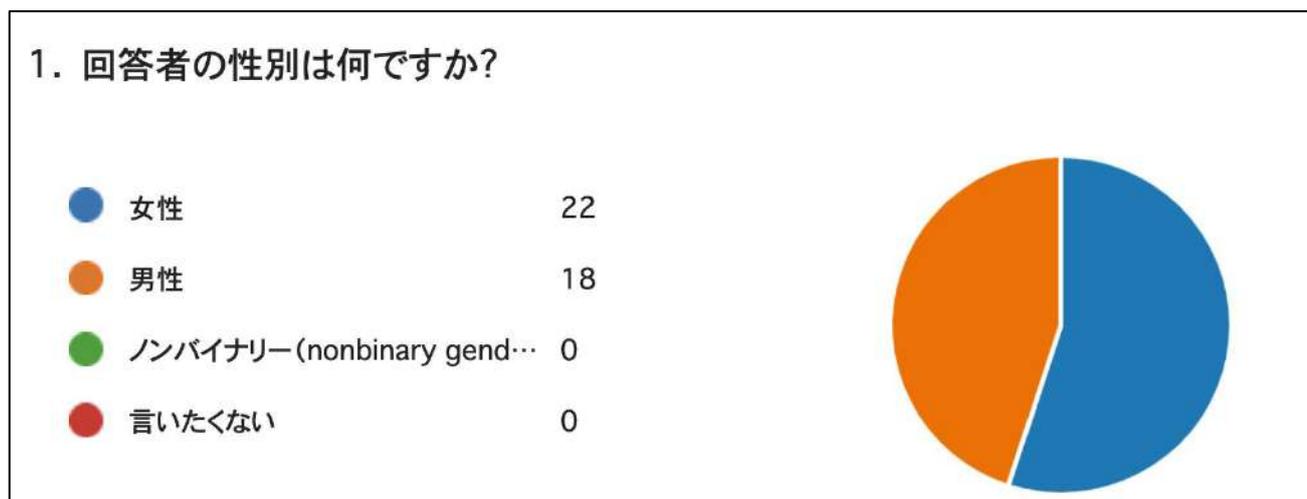
なお、障害の用語は法令上の「障害種別」などの場合であっても本報告書では「障がい」と「害」をひらがな表記に統一している。しかし、回答者の回答については、原文ママに記載している。

4. 調査の結果と考察

4.1. 調査回答者の基本情報・運動やスポーツに関する質問項目

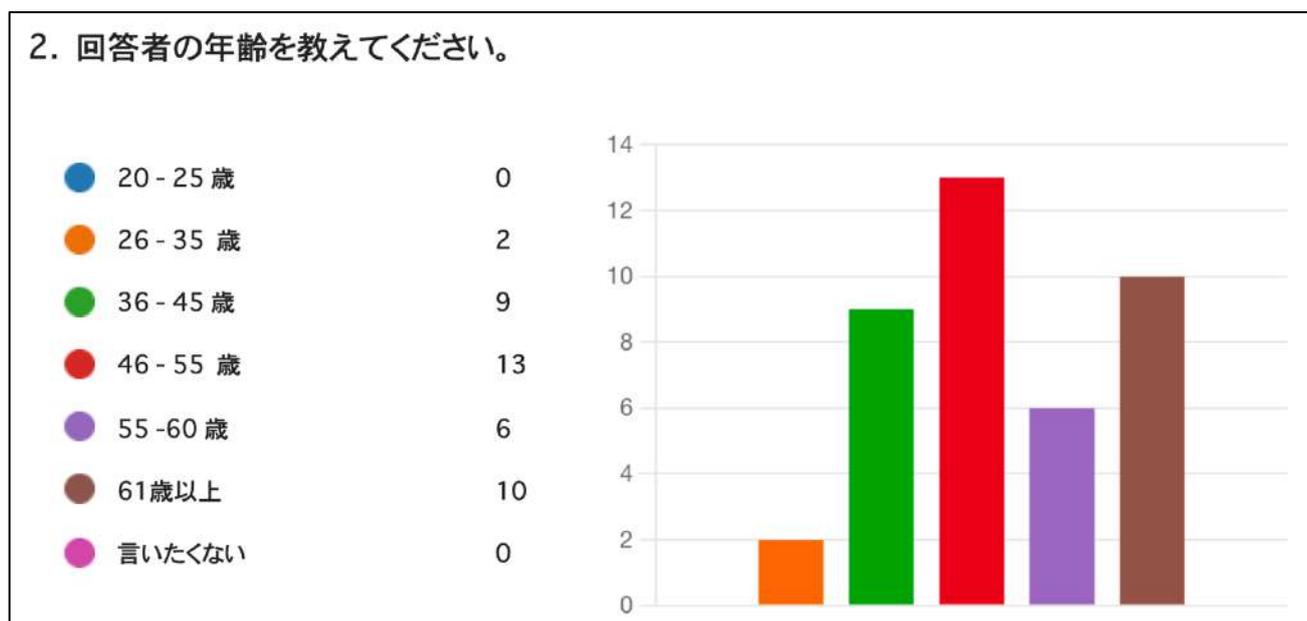
4.1.1. 性別

アンケート調査の回答者は、「女性」22名（55%）、「男性」18名（45%）であった。



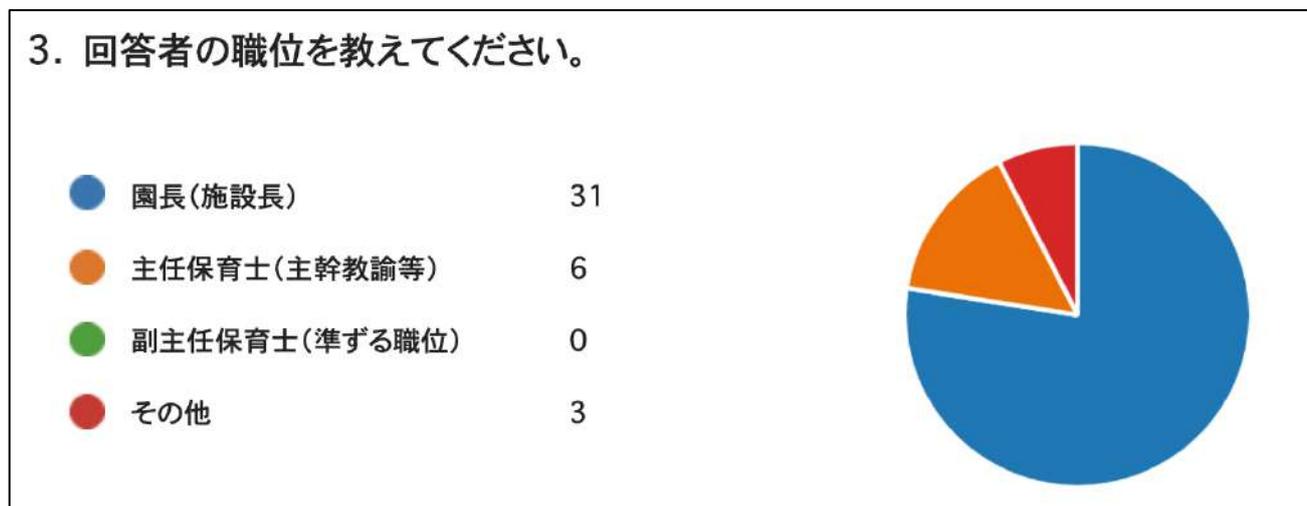
4.1.2. 回答者の年齢構成

アンケート調査の回答者の年齢は、「46-55歳」が13人（33%）と最も多く、次いで、「61歳以上」が10人（25%）、「36-45歳」が9人（23%）、「55-60歳」が6人（15%）、「26-35歳」が2人（5%）であった。



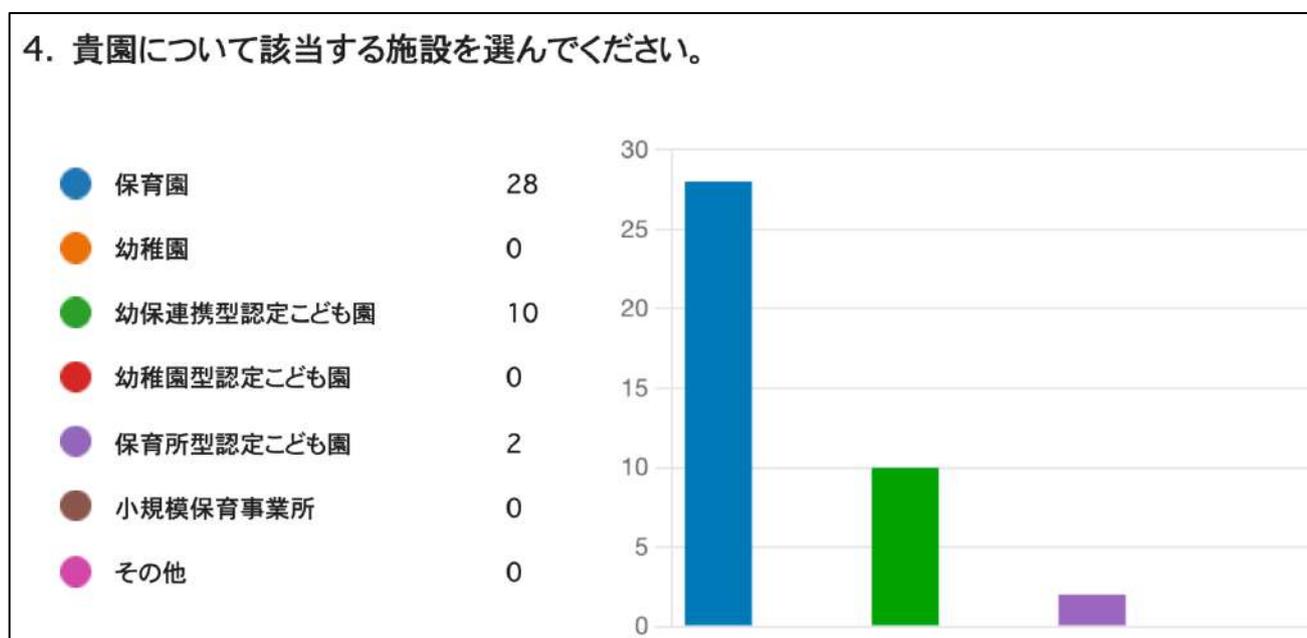
4.1.3. 職位

アンケート調査の回答者の職位は、「園長（施設長）」が 31 人（78%）、「主任保育士（主幹教諭等）」が 6 人（15%）、「その他」が 3 人（8%）であった。



4.1.4. 施設種別

アンケート調査の回答者の所属機関は、「保育園」28 人（70%）、「幼保連携型認定こども園」10 人（25%）、「保育所型認定こども園」2 人（5%）であった。「幼稚園」、「幼稚園型認定こども園」、「小規模保育事業所」はいなかった。



4.1.5. 施設母体（公立・私立）について

アンケート調査の回答者の施設母体については、「私立（社会福祉法人、学校法人等）」が39人（98%）、「公立」が1人（2%）であった。

5. 貴園の設立母体について以下から公立、私立、その他から選んでください。

● 公立(市立・町立など)	1
● 私立(社会福祉法人・私立学校法…	39
● その他	0



4.1.6. 施設定員数について

アンケート調査の回答者の施設における定員数については、「51人以上100人以下」が15人（38%）と最も多く、次いで「101人以上150人以下」が11人（28%）、「50人以下」が8人（20%）、「151人以上」が6人（15%）であった。

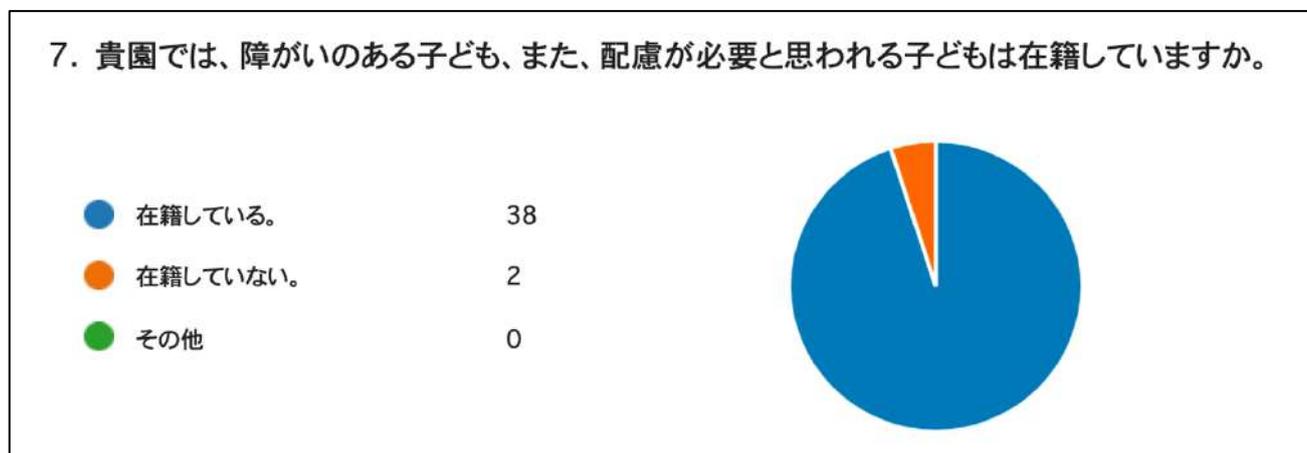
6. 貴園の定員数を下記から選んでください。

● 50人以下	8
● 51人以上100人以下	15
● 101人以上150人以下	11
● 151人以上	6
● その他	0



4.1.7. 障がいのある子ども、配慮が必要な子どもの在籍について

アンケート調査の回答者の施設における障がいのある子ども、また、配慮が必要と思われる子どもの在籍については、38人（95%）の施設で「在籍している」と回答した。「在籍していない」と回答した施設は2人（5%）であった。



4.1.8. 障がい認定を受けている子どもの数について

アンケート調査の回答者（障がいのある子どもの在籍があると答えた者の内33名が回答）の施設における、障がい認定を受けている子どもの数は、「認定を受けている数」は1人が最も多く7施設（24%）、次に2人が5施設（21%）、2人が5施設（17%）、6人が4施設（14%）、5人が3施設（10%）、7人が2施設（7%）、10人、8人が1施設（3%）であった（表1参照）。

なお、障がい認定を受けている子どもの数は定員数にも影響を受けるため、あくまでも概要として提示している。

表1 障がい認定を受けている子どもの数(人)

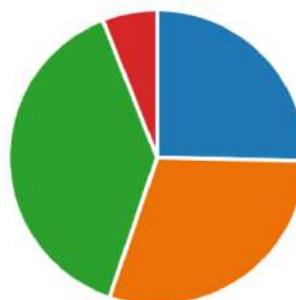
認定数(人)	施設数	割合
1	7	24%
3	6	21%
2	5	17%
6	4	14%
5	3	10%
7	2	7%
10	1	3%
8	1	3%

4.1.9. 障がい認定を受けた子どもの障がい種別について

アンケート調査の回答者（障がいのある子どもの在籍があると答えた者の内 33 名が回答）の施設における、「障がい認定を受けている子どもの障がい種別」については、「発達障がい」が最も多く 26 名、「知的障がい」が 20 名、「身体障がい」が 17 名、「その他」が 4 名であった。なお、数については「複数回答可」ため回答者数を超える数となっている。

9. 障がい認定を受けている子どもの障害種別について、該当する項目にすべてチェックを付けてください。

● 身体障がい	17
● 知的障がい	20
● 発達障がい	26
● その他	4

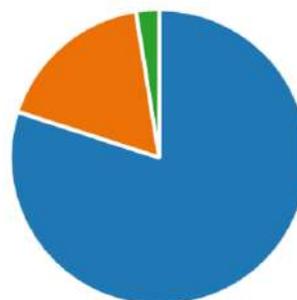


4.1.10. 障がいのある子ども、配慮が必要な子どもの保育における運動やスポーツの取り組みについて

アンケート調査の回答者の施設における、障がいのある子ども、配慮が必要な子どもの保育において運動やスポーツを取り入れているかについては、「取り入れている」が 32 人（80%）、「取り入れていない」2 人（18%）、「その他」1 名（2%）であった。

10. 障がいのある子ども、配慮が必要な子どもの保育において運動やスポーツを取り入れていますか。教えてください。一部でも取り入れている場合は取り入れているにチェックをお願いします。

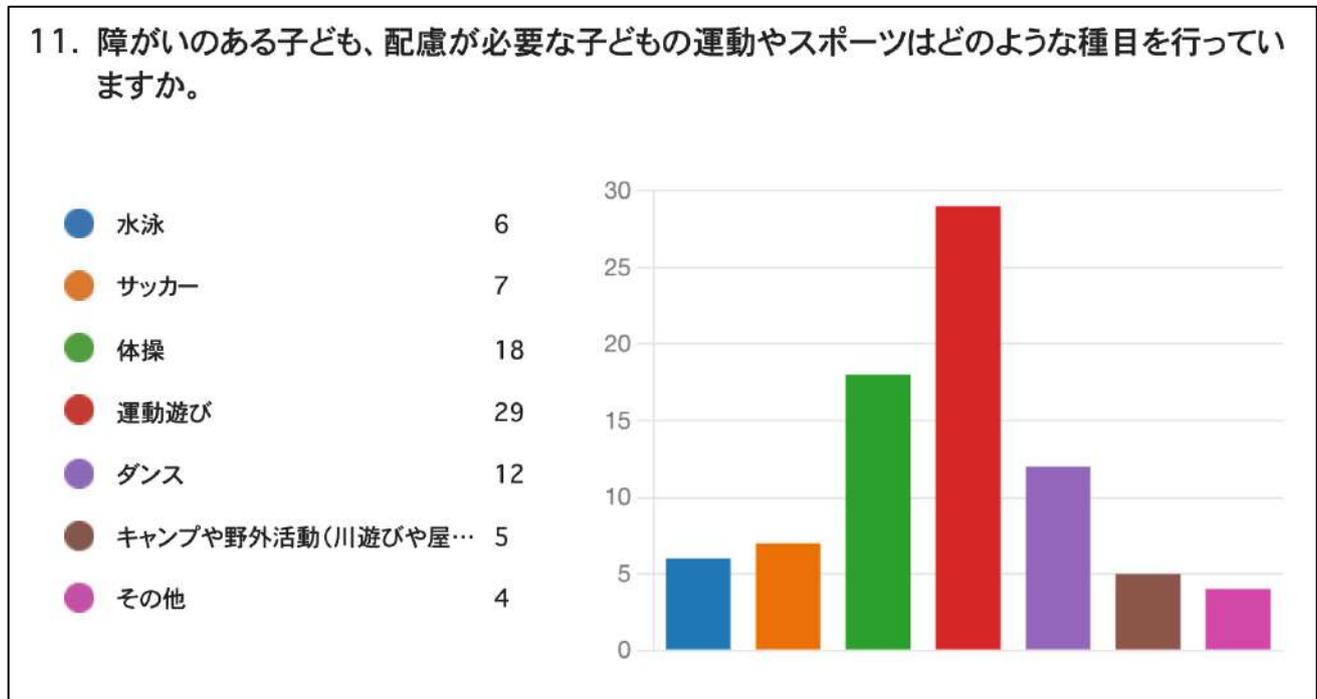
● 取り入れている	32
● 取り入れていない	7
● その他	1



4.1.11. 障がいのある子ども、配慮が必要な子どもの保育における運動やスポーツの種目について

障がいのある子ども、配慮が必要な子どもの保育において運動やスポーツを取り入れている種目についてである。

「運動遊び」が最も多く 29 人、次いで「体操」18 人、「ダンス」12 人、「サッカー」7 人、「水泳」6 人、「キャンプや野外活動」5 人、「その他」4 人であった。



4.1.12. 障がいのある子ども、配慮が必要な子どもの保育におけるスポーツの具体例（自由記述）

以下に、具体例を示す。各保育施設で工夫をこらした取り組みが行われていることが理解できる。また、子どもの発育・発達の観点からも運動遊びを中心に楽しく、そして身体を積極的に動かすことに主眼が置かれているとも考えられる。幼少期のスポーツ・運動は楽しく、そして成功体験を積み重ねられるような種目が望ましく、その点からも保育施設における積極的なスポーツの取り組みは有益であると考えることができる。

なお、回答内容については、原則、原文（読点、句点の有無も含めて）のまま記載している。ただし、読みにくい、修正が必要と筆者が判断した誤字、文書の揺らぎなどは筆者が一部修正している。

下記の自由記述の内容にもあるように、ボール遊び、跳び箱、マット運動、体操、鉄棒、リトミック、サッカー、積極的な身体を動かすことが多い様子が見られる。

【アンケート調査の回答より】

12 障がいのある子ども、配慮が必要な子どもの保育におけるスポーツの具体例(自由記述)

簡単なアスレチック、ゲーム遊び、音楽に合わせて体を動かす

体を使った体操やサーキット活動、外部コーチによる体操教室

特別に取り組んでいるというよりは、お友達と一緒に楽しみたいという思いが強いので共通の遊びが一緒に楽しめる様できないところを補佐しつつ取り組んでいる。

基本的な体育遊び

サッカー ストライダー

マット運動 鉄棒 跳び箱 縄跳び エイサー

サーキット、徒競走

ボール遊び 簡単な体操 園庭を走る

鉄棒、マット遊び、ボール遊び

マット運動やリズム運動

マット、跳び箱、体操等 健常児と一緒にいる

鉄棒、床マット、跳び箱

かけっこ、平均台、巧技台、ボールあそび、水遊び、歩く(散歩

スイミング・体操教室・鬼ごっこ・リトミック教室他

室内(マット運動 鉄棒 体操 ゲーム) 屋外(プール)

他の園児と変わらず、音楽に合わせた体操遊び。鬼ごっこ遊び、サッカー等

平均台、鉄棒等の器具、走る等

巧技台などを使って中枢神経にフィードバックを行う反復運動を行い、発達障害を予防・治療している

体操・ダンス・リトミック・かけっこ

マラソン、マット運動、ラジオ体操、ダンス、跳び箱、鉄棒

サッカー・跳び箱・鉄棒 ※身体的な要因で難しいものは、事前に保護者と話し合いを行い実施しない場合もあります

特定の運動やスポーツではなく、外遊びに重点においている

サッカー教室、運動遊びの教室(保育の中で取り入れている)への参加(健常児と同じ内容)

外部指導員による体操教室・巧技台・跳び箱・鉄棒・マット・ボール遊び・戸外ゲーム等

園生活の中で、他の子ども達が楽しんでいる全ての遊び(運動遊び含む)を、その子の成長に合わせて無理のない程度に取り組めるようにしています。

ボールあそび、鉄棒、雲梯、マット、かけっこ、マラソン、ダンス、玉入れ

ダンス、かけっこ、ボール遊び、体操、鉄棒、水遊びなど

毎朝、体育あそびの時間に、遊具での運転あそび、運動場を走る、ダンスなどを実施しています。

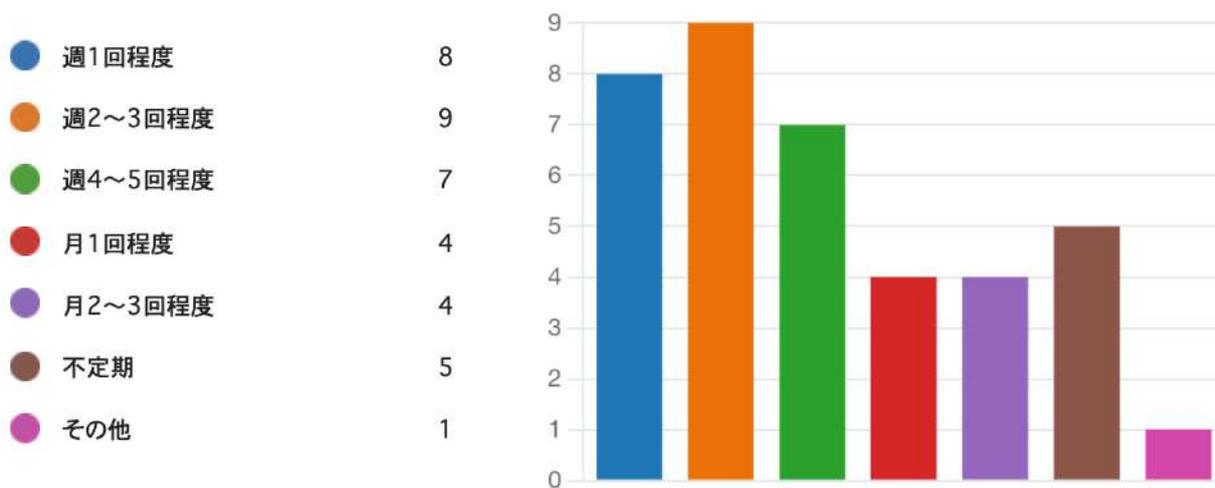
跳び箱 マット運動 鉄棒 竹馬 縄跳び等

4.1.13. 障がいのある子ども、配慮が必要な子どもの保育における運動やスポーツの頻度について

障がいのある子どもや特別な配慮が必要な子どもの運動やスポーツの実施頻度については、「週 2～3 回程度」が最も 9 人と最も多く、次に「週 1 回」が 8 人、「週 4～5 回」が 7 人、「月 1 回程度」「月 2～3 回程度」が 4 名、「不定期」が 5 名、「その他」が 1 名であった。

週 1 回以上の運動やスポーツを実施する施設は 24 名となっており、半数以上の保育施設で障がいのある子どもや特別な配慮が必要な子どもの運動やスポーツを実施する環境があるといえる。

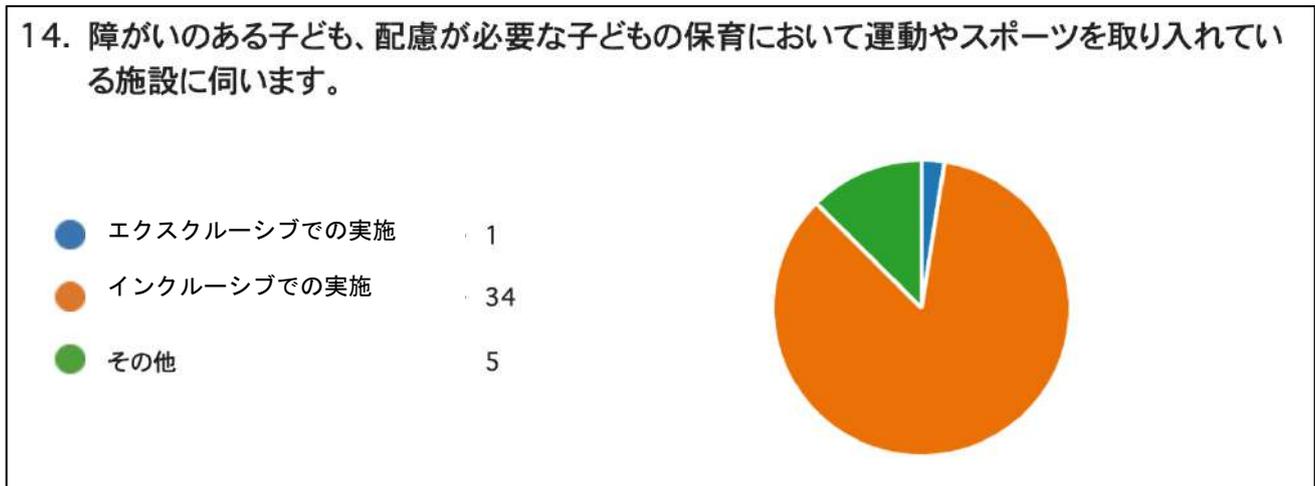
13. 障がいのある子どもや特別な配慮が必要な子どもの運動やスポーツの実施頻度を教えてください。



4.1.14. 障がいのある子ども、配慮が必要な子どもの保育における運動やスポーツの実施方法（インクルーシブかエクスクルーシブかなど）

障がいのある子どもや特別な配慮が必要な子どもの運動やスポーツの実施方法については、障がいのある子どもとない子ども分け隔てなく一緒に行う「インクルーシブでの実施」が34人（85%）、障がいのある子どもと障がいのない子どもを分けて行う「エクスクルーシブでの実施」が1人（2%）、「その他」が5人（13%）であった。

保育施設では、障がいのある子どもと障がいのない子どもも、配慮が必要な子どもなどが一緒に運動やスポーツを実施しているといえる。この点は、インクルーシブ保育がスポーツの場から発信されているとも考えられる。



4.1.15. 障がいのある子ども、配慮が必要な子どもの保育において運動やスポーツで今後、取り入れてみたい種目などについて

障がいのある子どもの運動やスポーツで、今後、取り入れてみたい運動やスポーツについては、以下のような回答があった。

それぞれの保育施設の理念や方針、また、環境等が異なるため一概に〇〇といった具体的な内容は少ないと予想していたが、以下のようにより具体的かつ発達や育ちの視点から積極的に運動やスポーツを取り入れたいと考えているのではないかと考えられる。以下では、回答をまとめて示したい。

【運動（遊び）】

- ルールのある運動あそび
- 運動遊びを取り入れる時の配慮の仕方や簡単にできる運動があれば知りたい
- 体幹の弱い・体のバランスが悪い子どもに対する運動
- ルールが単純でみんなが1番になれる運動あそび
- 微細運動を発達させる運動、など

【体幹】

- 体幹が弱くなってきていると感じている、リズム運動やリトミックを取り組みたいと考えている。
- 幼児期に体幹を意識した活動を心掛けています。
- 体幹の弱い・体のバランスが悪い子どもに対する運動。

【体操】

- 体操、バランスボール。
- 体操など、日常的に気軽に取り組めるもの。

【水泳】

- 水泳教室。

上記のような回答があった。具体的な種目についても以下に示す回答があっている。中でも、上述の運動遊び、体幹トレーニングにつながる運動・スポーツ、サッカーなど取り入れたい種目であることがわかった。

なお、アンケート調査の回答内容については、原則、原文（読点、句点の有無も含めて）のまま記載している。ただし、読みにくい、修正が必要と筆者が判断した誤字、文書の揺らぎなどは筆者が一部修正している。

【アンケート調査より】

15 今後、取り入れてみたい運動やスポーツはありますか。自由に記述してください。

微細運動を発達させる運動

体幹が弱くなってきていると感じている、リズム運動やリトミックを取り組みたいと考えている。

ボッチャ

水泳教室

サッカー

幼児期に体幹を意識した活動を心掛けていますので、12で記載した遊びに平均台を取り入れサーキット遊びを年齢に応じて発展させていきます。

対象になる子どもがいませんが、サッカーなど

特に現時点で検討している事はありません

水泳教室

トランポリン

体操、バランスボール

ルールのある遊び

平均台等

フリスビー

ルールのある運動あそび

具体的にはないが、運動遊びを取り入れる時の配慮の仕方や簡単にできる運動があれば知りたい

体幹の弱い・体のバランスが悪い子どもに対する運動

体操など、日常的に気軽に取り組めるもの。

現状以上には、考えていませんが、子どもたちの興味に合わせて色々な事に挑戦していくことができればと思っています。

音楽に合わせて体を動かすリトミック

ルールが単純でみんなが1番になれる運動あそび

何が必要なのでしょうか。その都度、この子の為になる事を取り入れます。

4.1.16. 障がいのある子どもの運動やスポーツ実践上の困難と感ずるところ

障がいのある子ども、配慮が必要な子どもの保育において運動やスポーツを取り入れる上での困難なこと、難しいと感ずることについて以下の回答があった。

「特にない」との回答もあったが、以下に示すように、障がいのある子ども、配慮が必要な子どもの保育における運動やスポーツの取り組みでは、何らかの困難性もあることが示されたといえる。例えば、保護者の理解などは、保護者の子どもの障がいの理解や保護者と保育施設の運動やスポーツに関する考え方や捉え方などの共通理解など、積極的な関わりとコミュニケーションが必要である。また、障がいの種別や重度か軽度かなど子ども一人一人の障がいの違いに対応する場合の保育施設側の問題、課題などある。特に、保育施設では、保育者が運動やスポーツに関わるが多いため、運動やスポーツに関する専門性、知識と技術については未知数である。今後は、障がい者スポーツに知識と技術を有する指導者の活用も必要であろう。

以下では、下記の回答からカテゴライズしてまとめを示す。

【配慮や工夫の必要】

- 苦手感がある子どもさんも増えていて、一律に揃える競技が難しくなっているので、工夫が必要と思う。
- 体幹が弱かったり、訓練靴を使用したりなど配慮を必要とする場合の対応。
- 一人保育士が必要（1人の保育士を1人の子どもに配置するマンツーマンでの対応の意味であろう）
- 課題に取り組む際には必ず保育士及び補助の職員がサポートする必要がある。人員確保が難しいときがある。
- 安全面での配慮。
- 体への負担の気づきにくさ、看護師も必要など。

【理解】

- 親の理解です。
- ルールの理解。始める時に伝えるが、理解が厳しいこともある。
- ルールの理解と定着。
- 順番を待てなかったり、ルール理解が難しい時の対応や工夫が難しい。

【参加】

- 運動会などの行事への参加の内容。
- 気分が乗らないとお部屋の隅で眺めている子ども、逆に自分の思うままに参加することなど。
- 情緒不安定な時や内容が難しかったりする時は、本人に参加するかどうか聞いたり、職員が状況判断したりしている。
- 体調、気分等でいつも喜んで参加してくれる訳ではない。

【課題】

- 保護者の希望との差異が課題にはなる可能性がある。
- 保育者の人数や専門性など。

- 子どもの予想外の行動への対応など。
- スポーツ時の子どもの支援と補助など。

以下では、回答を示しておく。なお、アンケート調査の回答内容については、原則、原文（読点、句点の有無も含めて）のまま記載している。ただし、読みにくい、修正が必要と筆者が判断した誤字、文書の揺らぎなどは筆者が一部修正している。

【アンケート調査より】

16 障がいのある子ども、配慮が必要な子どもの保育において運動やスポーツを取り入れる上での困難なこと、難しいと感じることを教えてください。

運動会などの行事への参加の内容

同じ視点で見ない

はっきりと診断されていない子どもの中にも苦手感がある子どもさんも増えていて、一律に揃える競技が難しくなっているので、工夫が必要と思う。

親の理解です。

体幹が弱かったり、訓練靴を使用したり、など配慮を必要とする場合の対応

集団での話が聞けない。内容理解が難しい

ルールに則った種目でなく、自由あそびの中で楽しめるものを子ども自身で選んで遊ぶ(一斉種目無)

その子に応じて無理なく楽しんでいる姿が見られるように活動をしているので、現在は特段の困難さはないが、今後新しく配慮が必要となった園児に対しては、保護者の希望との差異が課題にはなる可能性がある。

自閉症だとそもそも本人をやる気にさせるのが難しい

障がいも色々あるので、その園児に応じた運動をする。

ルールの理解。始める時に伝えるが、理解が厳しいこともあり、その都度言葉をかけて友達と一緒に過ごすことが楽しいと実感できるよう心掛けています。

今現在、対象の子どもはいませんが、一斉に指導しながら取り入れるのが難しいと思います。

集団に加われない場合もあり、気分が乗らないとお部屋の隅で眺めている子ども、逆に自分の思うままに参加することなどもあります。排除するのではなく一緒に活動するようにしています。

例えば運動会などの行事を行う場合でも、一斉的な動きを求めること自体が難しく、そもそも求めること自体に無理があるのでとは考えている。

その日の気分によっての対応や言葉かけ

興味を示さない

危険防止の為の配慮等の予想を超えるような事がありがちである事。

気持ちのコントロールと安全面での配慮を一人一人に合った援助を行うこと。

一人保育士が必要

情緒不安定な時や内容が難しかったりする時は、本人に参加するかどうか聞いたり、職員が状況判断したりしている。

身体ケアが必要な子の場合の体調把握。

体幹の弱さ、体の使い方の拙さがあるものの、他児と同様以上のチャレンジを本人が求める。(完璧主義)・一番にこだわる子もいる。(並び順も勝敗も全て)

国が定めた治療法が無い為独自に手探りでやっている

体操など曲を聴いて体を動かす時に聴こえない子どもにどう関わると良いのか難しいと思った。

個人差があるので危険な場面も見受けられる。

周囲を見て、周囲と合わせることが難しい部分があるので、事故防止に留意が必要。

興味関心をもってもらおうこと。 ルールの認識。

ルールの理解と定着

課題に取り組む際には必ず保育士及び補助の職員がサポートする必要がある。人員確保が難しいときがある。

ルールがある遊び(ドッチボール等)

園での状況を伝え、特別な対応があれば家庭と相談しながら進めています。

一緒に参加をさせてあげたいが、順番を待てなかったり、ルール理解が難しかったりした時の対応や工夫が難しい

ルールの理解が難しい、勝ち負けにより激しく落ち込む

安全面での配慮が必要

体への負担の気づきにくさ、看護師も必要など

専属の保育士の確保が厳しい

体調、気分等でいつも喜んで参加してくれる訳ではありません。寄り添っているつもりでも、そうでなかったと後から気づいたり、進んで下がりながら喜び合えたり、した時を励みに接しています。

補助の仕方など

4.1.17. 障がいのある子ども、配慮が必要な子どもの保育において、運動やスポーツを実践することで、子どもの育ちにどのような影響を与えるか

障がいのある子ども、配慮が必要な子どもの保育において運動やスポーツを実践することで、子どもの育ちにどのような影響を与えるかについては以下の回答があった。

障がいのある子ども、配慮が必要な子どもの運動やスポーツの影響については多くの意見が寄せられている。体力や運動能力の向上だけでなく、達成感や意欲の向上、成功体験、自尊感情、人間関係の学び、情緒面、刺激、楽しみ、など多くの影響があるのではないかと回答されている。

このような点を踏まえると、今後、保育施設では、運動やスポーツを積極的に取り入れていくことが子どもの成長に寄与するのではないだろうか。以下では、回答をカテゴライズしてまとめて示したい。

【発達】

- スモールステップを積み重ねる成功体験によって情緒面にも、著しい影響があると考える。
- 健全な発達のためにも小さい時には出来る範囲でやらせてあげたい。
- 他の友達と一緒に活動する事で心の発達には良い影響を与えたいと思う。
- 運動やスポーツを通して意欲や気力の減弱、対人関係やコミュニケーションや子どもの心の発達にも重大な影響を与えたいと思います。

【スポーツにこだわらない】

○スポーツがどのように影響を与えるかは私たちの保育園では重要視しておりません。いかにどの子ども興味関心を持って活動に取り組めるかを考えている。

○障がいに関係なく、興味があるもので遊ぶので、スポーツとは、言えない。

○スポーツにこだわらず、友だちと一緒に様々な活動をすることが、小さい成長かもしれませんが大切だと思っている。

【刺激】

○身体や指を動かす事は、脳や神経に刺激を与える事、言語の向上にやくにたつ。

○切磋琢磨することによって刺激を受け、見よう見まねでやってみようと興味や関心が出ると思います。

○お互いの刺激により、相乗効果が期待されるのでは。

○当該児とその他の園児が自然にお互いを理解することにつながる、神経系統の刺激になる。

【友だち・人間関係】

○他の友達と一緒に活動する事で心の発達には良い影響を与えると思う。

○得意な事苦手な事は誰でもあるので、少しでも上手くできるよう友達を助けていこうと常に子ども達に伝えています。

○友達との人間関係づくりを促し、社会性を高める。

○体力面の強化もだが、ルールのある運動や友達と協力する経験も期待できると思う。

○子どもたち同士が励まし合い達成感を共有することで人間関係も深まっていく。

上記のようなことから、障がいのある子ども、配慮が必要な子どもの運動やスポーツを取り入れることで、多くの影響があることを回答している。つまり、保育施設における運動やスポーツの重要性を十分に理解しているのではないかと考えることができる。

なお、アンケート調査の回答内容については、原則、原文（読点、句点の有無も含めて）のまま記載している。ただし、読みにくい、修正が必要と筆者が判断した誤字、文書の揺らぎなどは筆者が一部修正している。

【アンケート調査より】

17 障がいのある子ども、配慮が必要な子どもの保育において運動やスポーツを実践することで、子どもの育ちにどのような影響を与えるかなど、お考えを教えてください。

運動で体を動かすことで意欲面や達成感が味わえている

同じ様に活動が出来ことを知る

スポーツがどのように影響を与えるかは私たちの保育園では重要視しておりません。いかにどの子ども興味関心を持って活動に取り組めるかを考えておりますので、もしそのスポーツに対して興味を強く持って取り組めたとしたら、自己肯定感や自尊感情、達成感など。また、嬉しさや悔しさなども経験できるのではないかと思います。

子どもさんの思いに沿って、興味のあることを楽しむという事が大切だと思っている。

身体や指を動かす事は、脳や神経に刺激を与える事、言語の向上にやくにたつ。

歩く走るなど基本的な身体の動きの繰り返しにより、少しずつではあるが動きがスムーズになってくる。子どもたち同士が励まし合い達成感を共有することで人間関係も深まっていく

1つの経験として、または何かを始まるきっかけになるといいかと思っています。

障がいに関係なく、興味があるもので遊ぶので、スポーツとは、言えない。

障がいのあるなしに関わらず、体の使い方や、運動機能の発達は勿論、出来なかったことをやってみたい、出来た、出来なかった、もう一度など、スモールステップを積み重ねる成功体験によって情緒面にも、著しい影響があると考えます。

歳を取るにつれて健常者との差は広がると思われるので健全な発達のためにも小さい時には出来る範囲でやらせてあげたいです。また、サーキットなどでほんの少しは順番を待つとか他の子を避けるとかいう意識を育てているのかなとは思いますが。

他の友達と一緒に活動する事で心の発達には良い影響を与えようと思う。

苦手なことを率直に子ども達に伝えますが、得意な事苦手な事は誰でもあるので、少しでも上手くできるよう友達を助けていこうと常に子ども達に伝えています。配慮が必要な子どもができない場面があっても、応援したり、出来たことを保護者に伝えたり、思いやりの気持ちが育ってきています。しかしそれは大人の働きかけもとても重要だと思えます。

切磋琢磨することによって刺激を受け、見よう見まねでやってみようという興味や関心が出ると思えます。

スポーツにこだわらず、友だちと一緒に様々な活動をすることが、小さい成長かもしれませんが大切だと思っています。

出来る・出来ないというよりも寧ろ、周囲の配慮やその子への理解こそが子ども達の将来に向けて大切な価値観や生き方を示してくれているように感じることもある。

運動やスポーツを通して意欲や気力の減弱、対人関係やコミュニケーションや子どもの心の発達にも重大な影響を与えようと思えます。

全身の運動機能の発達を促すことができる

一人では体を動かすこと自体に戸惑う子ども、みんなと一緒にならスムーズに体が始動し、日常的な動きの領域を広げる事につながっていると思う。

自分で気持ちをコントロールできるようになり、目的を目指して自分なりに課題解決に向かう力が高まると思えます。

体の使い方やバランス感覚を高め体力向上につながる。また、友達との人間関係づくりを促し、社会性を高める

障がいのある子ども、配慮が必要な子どももみんな一緒に楽しみ、思いやりや優しさ等が育ち合えばと願っています。

運動できる子、したいと思っている子はそのまま一緒に体を動かせばいいと思う。サッカーなどルールがある遊びはあるが、言ってもまだまだルールより楽しくみんなでボールを追いかける遊びになっている。それでいい

体力面の強化もだが、ルールのある運動や友達と協力する経験も期待できると思う。

状態の改善が見込まれる

運動やスポーツを通して不器用な子どもは、体を自分でコントロールする力が身につくのではないかと思う。また、人との関わりの経験を増やし体を動かして発散してその後も気持ちよく過ごすなどで影響を与えるのではないかと思う

お互いの刺激により、相乗効果が期待されるのでは。

運動に取り組み、出来るようになることで自信を持つことができ、その他の事への意欲にも伝わる。

体を動かす喜びを感じることができる。

簡易なものであればルールを学び、社会性を身につけることができると思う。

家庭や、自分ではなかなか取り組まないような動きなどにもチャレンジできる。他の子とチームを組むことで連携する力が身についていく。

体全体を使って運動することで、いつも使わない部分を刺激し、遊びのルールを知り、他児とのコミュニケーションが取れる事。また、その子自身が持っている能力が引き出せる機会もあると考える。

出来るようになった喜びを感じ、皆で何かに取り組む楽しさに触れる事ができているのではないかと感じます。

視野や可能性が広がる。運動面、体力面の強化にもつながる。

当該児とその他の園児が自然にお互いを理解することにつながる、神経系統の刺激になる

体や運動機能の発達、

より健やかな成長が促されると思います

五感の発達に繋がり、ストレスの緩和

運動能力向上だけでなく、ルールを知ったり、守れたり、守れなかったり。勝った喜びや共に頑張る連帯感。

障がいのあるなしに限らず、脳の発達や運動機能が発達すると考えます。又、運動をすることで転倒防止など危険予知につながる。

4.1.18. その他、障がいのある子ども、配慮が必要な子どもの運動やスポーツの取り組みについてご意見や感想

以下では、その他、障がいのある子ども、配慮が必要な子どもの運動やスポーツの取り組みについての意見や感想を記す。

下記に示したように、多くの意見や感想をいただいた。一部紹介するが、障がいの有無で区別しない、や健常児と過ごすことで、互いが成長し合う、同じ空間で運動支援を行いたい、子どもたちの良いところを見つけて成長を支える意識を持ちたい、保護者に子どもの障がいの受容をしてもらうことで、早い段階でスポーツなどに取り組むことができるようにしたい、など障がいのある子ども、配慮が必要な子どもの運動やスポーツの必要性や重要性に関する意見や感想が多く寄せられた。

なお、アンケート調査の回答内容については、原則、原文（読点、句点の有無も含めて）のまま記載している。ただし、読みにくい、修正が必要と筆者が判断した誤字、文書の揺らぎなどは筆者が一部修正している。

【アンケート調査より】

18 その他、障がいのある子ども、配慮が必要な子どもの運動やスポーツの取り組みについてご意見や感想を自由に記述してください。

障がいがある子どもだけを特別に支援するのではなく、健常児と過ごすことで心身共に成長しているように感じるので、同じ空間の中での運動支援を続けていきたい

余り区別しないで取り組む

障がいを持った子どもたちはどうしても壁ができるタイミングがあると思いますが、未就学児のステージでは隔たりがあるような活動をするのは時期尚早かと思います。それよりも大事なことをスポーツだけではなく、いろんな活動をみんなが楽しめるように保育者が工夫をしていく必要があります。根本的な考え方を日本中で変えないといけません。単にスポーツがどう影響するかではなく、子どもたちは何でも影響を受ける存在です。まずは安定した環境作りをしないとと思っています。

いろいろなことに取り組んでみて、その中で子どもたちのいい所を見つけ成長を支えることを意識している。

親に早くお子さん障害のある子どもに理解し早く病院で診断してもらい小さい時取り組んでもらいたい。

園内だけではなく、専門の理学療法士等との連携が必要と思う。

運動やスポーツに関して始める前のルールを説明するのに手だてが必要で、他の子と一緒に始められるように工夫が必要です。どこまで一緒にできるのかも見極めていくことが出てくる。

園及び保育士が出来る事は、自由に遊べる場所及び設備(環境)の提供

配慮が必要な子どもに対しては基より、そこに関わる保育士がどのような配慮が必要かを考え、どのような言葉を掛けるかを思案することによって保育士自身が成長させてもらうことの重要性が多にあると思う。そこには、障がいがあるから、出来ないではなく、その子がやりたいことを楽しむためには、どのようなことが保育士によって手伝えるのかを考えるのみで、行わないという選択肢は今まではない。

正直、自閉症の子供に運動をさせるのがその子の為になるのかはわかりません。親や保育者のエゴかもしれないとも思います。子供自らやる気を出してくれればもっと迷いなく取り組めるのですが、何十年経ってもその子から感想を聞くことも叶わないと思うと少し悩んでしまいます。

園児一人一人が障がいがあるのでその子に合う運動をする事。

子どもに配慮した運動のプログラムが必要ですが、子ども達が意欲を持って活動できる内容(友だちと一緒に楽しめること)が大切だと思います。

障がいのある子ども、配慮が必要な子ども、障がいのない子どもも一緒になって取り組むことで、相乗効果があり、思いやりの心や助け合いの心が芽生えるように思います。一斉に指導することは難しいと思いますが、子ども達の発達には良い影響になると思います。

障がい手帳を持っているようなお子さんはいませんが、配慮が必要なお子さんも他の子ども達も、同じように毎日過ごしています。

10年以上前だったが、巧技台を用いての運動遊びを取り入れて、子どもの身体発達に取り組んだ時期があった。今思えば、身体の発達と言うよりもやり方次第で心身の発達に繋がる取り組みだったように振り返る。今では遊び感覚で巧技台を取り入れているが、その当時はもっと本気で、チャレンジする勇気や出来た時の達成感、そして出来ない子への声掛け・配慮・共感など様々なものが凝縮された感情体験の場だったように振り返る。因みにその巧技台の活動は、もともと障害児の身体発達の為に開発しようとしたある取り組み・実践だったが、その活動は障がい児だけに留まらず、内容を変化させることによりどの子も楽しめる活動となっていった。そう考えれば、大事な事は感情体験がそこにあっただろうか。

いかに運動やスポーツや体を一緒にお友達を動かすことの楽しさやできた時の喜びそして沢山ほめてあげたいと思っています。

個々に支援していく体制が充実していけばよいと思う

出来る範囲で可と考えています。

運動やスポーツには体づくりはもちろんのこと、精神面での変化も大きくあるのではないかと思います。運動やスポーツは人の可能性を無限大に発揮できるものであると思います。

一緒に同じ活動は出来なくても他児が取り組んでいる姿を傍観したり、真似したりする事によって交流が来ているので運動やスポーツの必要性を実感しています。

スポーツに限らず、傷がいの有無に限らず興味がありやりたいとその子が思うなら、体調体力に応じて楽しく参加できるようにすればいい。逆に障がいが無くてもあっても、興味ややる気が出ないなら無理にやらせる必要はない。

可能な限り全員同様の経験をさせてあげたい。

ただ付き添って解除するだけでなく、改善のためのプログラムを国が主導して研究してもらいたい

運動やスポーツは意外と沢山の体の部位を複雑にコントロールしているので、体のコントロールが不器用な子どもには体の動きを細分化して伝えるといいと以前の研修で聞いた。そのような支援の仕方は保育園に勤める自分にとっては、子どもたちみんなに対してやってもいいことだとも思った。

保育園では取り組みに限界もあり、適した対応が出来ているのかが不安。対象者に対する対応の検討会が必要ではないかと思う。

身体を使うことは基本、積極的に取り組んでいきたいと思います。

子どもの気持ちを職員が汲み取り、その子にとっての適度な運動ができるよう配慮する保育力が求められる。

障害の有無に関わらず、幼少期に運動やスポーツを通じて学ぶことは大切なことである。は

スポーツの実践に限らず、他の子と同じように活動に参加することが重要であると考えている。できる・できないではなく、どんなことにも工夫次第で取り組めるということを大事にしていきたいと思っている。

障害のあるなしにかかわらず、一人ひとりに合わせた対応を心掛けています。

保育園や幼稚園と施設の交流。スポーツなどを通して、障がいのある子ども達と関わる機会を増やしていけるといいなと思う。

楽しく一緒に遊ぶなかで、互いに認め合うことができる関係性を自然に築いていく力を身につけてくれると嬉しいなと願っています。

できるだけ取り組んでいく事が重要だと考えます。

小さい内にいろいろな体験ができればいいと思います

安全安心な環境と人材を求める

今回考える時間を頂きありがとうございました。

今のところは、園のプログラムがあっていると思います。

5. まとめ

5.1. 結果のまとめ

アンケート調査の目的は、保育施設で障がいのある子どものスポーツ（運動遊びを含む）の実施状況、保育施設管理者の運動やスポーツに対する課題や希望などの考え方について明らかにすることである。

以下では、調査の概要についてまとめを示したい。

- ①基本情報と回答：年齢や性別、施設の種別・規模、職位と障がいのある子ども、配慮が必要な子どものスポーツについての意見や回答に有意な差は見られなかった。
- ②障がいのある子ども、また、配慮が必要と思われる子どもは在籍について：38人（95%）が在籍していると回答した。また、障がい認定を受けている子どもの数は、「認定を受けている数」は1人が最も多く7施設（24%）、次に2人が5施設（21%）、2人が5施設（17%）、6人が4施設（14%）、5人が3施設（10%）、7人が2施設（7%）、10人、8人が1施設（3%）であった。障がい種別は、「発達障がい」が最も多く26名、「知的障がい」が20名、「身体障がい」が17名、「その他」が4名であった。
- ③障がいのある子ども、配慮が必要な子どもの保育において運動やスポーツを取り入れているかについて：32名（80%）が「取り入れている」と回答していた。
- ④実施している障がいのある子ども、配慮が必要な子どもの運動やスポーツの具体例を教えてくださいの項目について：運動遊びが29人で最も多かった。その他、体操、ダンス、水泳、サッカーなどであった。
- ⑤障がいのある子ども、配慮が必要な子どもの運動やスポーツの具体例：子どもの発育・発達の観点からも運動遊びを中心に楽しく、そして身体を積極的に動かすことに主眼が置かれているとも考えられる。幼少期のスポーツ・運動は楽しく、そして成功体験を積み重ねられるような種目が多かった。ボール遊び、跳び箱、マット運動、体操、鉄棒、リトミック、サッカー、積極的な身体を動かすことが多い。
- ⑥障がいのある子どもや特別な配慮が必要な子どもの運動やスポーツの実施頻度について：「週2～3回程度」が最も9人と最も多く、次に「週1回」が8人、「週4～5回」が7人、「月1回程度」「月2～3回程度」が4名、「不定期」が5名、「その他」が1名であった。
- ⑦障がいのある子ども、配慮が必要な子どもと、障がいのない子どもと一緒に運動やスポーツに取り組む際の実施方法について：障がいのある子ども、配慮が必要な子どもと一緒に実施（インクルーシブ）が34名（85%）と大半を占めていた。
- ⑧今後、取り入れてみたい運動やスポーツはありますか。自由に記述してくださいについて：【運動（遊び）】【体幹】【体操】【水泳】にカテゴリ化でき、具体的な種目についても以下に示す回答があっている。中でも、上述の運動遊び、体幹トレーニングにつながる運動・スポーツ、サッカーなど取り入れたい種目であることがわかった。
- ⑨障がいのある子ども、配慮が必要な子どもの保育において運動やスポーツに取り組む際に保育者として困難と思うこと：以下にまとめる。
【配慮や工夫の必要】：安全の配慮や工夫、子どもへの配慮や工夫、ルールの配慮や工夫など。
【理解】：親の理解、子どものルールの理解、保育士の理解など。
【参加】：各種行事への参加、活動に参加できない場合、子どもの気分と活動参加など。
【課題】：保育士の人員確保、保護者の希望との差異など
- ⑩障がいのある子ども、配慮が必要な子どもの保育において運動やスポーツを実践することで、子ども

の育ちにどのような影響を与えるかなどについて：以下にまとめる。

【発達】：子どもの心理、社会、身体的な発達など。

【スポーツにこだわらない】：スポーツだけでなく、楽しむことの大切さなど。

【刺激】 運動やスポーツを通じて、精神的、身体的な刺激など。

【友だち・人間関係】：運動やスポーツを通じて友だちとの関わりや人間関係の構築など。

上記のようなことから、障がいのある子ども、配慮が必要な子どもの運動やスポーツを取り入れることで、多くの影響があることを回答している。

⑪障がいのある子ども、配慮が必要な子どもの運動やスポーツの取り組みについてご意見や感想を自由に記述について：保育施設管理者の感想を以下にまとめる。

- 1) 運動やスポーツが子どもたちに良い影響を与える。
- 2) 運動やスポーツを子どもが楽しむこと、ルールを理解できるように配慮や工夫が必要である。
- 3) 友だちと身体を動かす喜び、一緒に楽しむための工夫も必要である。
- 4) 運動やスポーツは人の可能性を無限大に発揮できるものである。
- 5) 子ども主体の運動やスポーツのあり方も検討する必要がある。
- 6) 人員の配置、指導者である保育士の専門性の向上にも配慮する必要がある。
- 7) 専門家の指導を受けることも必要である。など

障がいのある子ども、配慮が必要な子どもの運動やスポーツの取り組みについては、好意的に捉えられており、運動やスポーツが子どもの成長に寄与できると考えていることがわかる。

5.2. 結果を踏まえた提案

以下では結果を踏まえて3点提案（考察）したい。

1点目は、保育施設における障がいのある子ども、配慮が必要な子どもへの運動やスポーツのあり方については、目的、目標、理念や方針などについて一定の方向性を示すことである。その理由は、第1に保護者、保育者の共通理解の促進である。今回のアンケートからも理解できるように、保護者と保育施設、保育者が共通理解のもと、子どもの保育、運動やスポーツ実践に取り組むことは必須である。しかし、その取り組みには困難性もあることを理解しておく必要がある。可能な限り、子どもの保育における運動、スポーツの重要性、そして、その有効性を丁寧に保護者に説明すること、さらには保育者の専門性を活かした保育のあり方等についても説明していくためにも、運動やスポーツに取り組む理由や理念、子どもの育ちなどについて目的と目標など一定の方向性を示しておくことは重要であろう。

2点目は、外部の専門家の活用である。保育者は、スポーツや障がいの専門家とはいえない。この観点からも、障がいのある子ども、配慮が必要な子どもたちへの運動、スポーツ指導については難しさを感じていることもアンケート調査から理解できる。運動遊びとした視点から子からと関わり、あるいは指導の内容を見ても、不安があることが推測できる。このことを踏まえ、障がいのある子どもや配慮が必要な子どもへのスポーツ指導を専門とする外部の指導者の活用は今後期待できるのではないだろうか。この点については、多忙を極める保育者の負担を減らすという観点からも有益であろう。

3点目は、保育者、保育施設の障がいのある子どもたちや配慮が必要な子どもたちの運動やスポーツの重要性の共通理解をより一層促していくことである。現在でも、十分に運動スポーツの重要性は理解されているところであるが、このことを、の理念や方針と照らし合わせて、普段の保育実践にどのように活

かしていくかと言うことを常々考えておく必要がある。さらに、この点については、保育施設だけの共有ではなく、保護者、あるいは、地域との共有することで、障がいのある子どもや配慮が必要な子どもへの運動やスポーツ指導が容易になるのではないだろうか。

以上 3 つの点を述べてきたが、子どもがより豊かに、そしてより幸せに成長していくためにも、運動やスポーツだけでなく、日ごろから体を動かすことの喜びや楽しみを伝えていくことを忘れてはならない。また、保育者自身も運動やスポーツの楽しさ、そして喜びを実感できるような、少しゆとりのある保育施設にすることを施設管理者（園長など）は考えていった方が良いのではないだろうか。